

## ダイイング・レッスン【声劇用】

### 【登場人物】

本田 聡一

鈴木 美智子

松田 次郎

泉 好実

人通りのほとんどないところに位置する廃屋。

1

本田、スマートフォンを取り出し、ボイスメモを起動する。

本田 あ、あ……よし、録音するぞ……ええと、……あ  
あなたがこのメッセージを聞いているということは、俺  
はもう、この世にいいやい、

咳払いをし、「あーあー」などと軽く発声する。

言葉を言い間違えないように、「いない。いない。この世にいない。」などと繰り返し、練習する。

軽く咳払いし、もう一度、録音に入る。

本田 ……あなたがこのメッセージを聞いているという  
ことは、俺はもう、この世に「いない」だろう。この  
メッセージを録音し終えた後、俺は、この廃屋で、自  
分で作った爆弾を爆発させ、死ぬ。俺のスマートフォン  
から命令を送ると、俺のカバンに入っている爆弾が  
爆発する仕組みだ。……これ作るの、けっこう大変だ  
った。作ってる途中に、導火線に火をつけて爆発させ  
るタイプにすればいいと思ったけど、もう8割くらい  
作り終えたあとだったから、今更それを無駄にするわ  
けにもいかず、がんばって仕掛けをつくった。褒めて  
くれ。……さて、なぜ俺が死にゆのか、

軽く咳払いし、もう一度、録音に入る。

本田 続きを話そう。なぜ俺が死にゆ、（咳払い）「死ぬ」  
のか。バカげた話にきこえるかもしれないが、俺には  
愛する人がいた。まゆゆちゃんだ。彼女っていうか、  
……彼女だ。……彼女だった。1年前、俺はまゆゆに  
振られた。「ダメなところがあつたら直す」と言ったら  
こう言われた。「なんか生理的にやだ」。それから仕事

も休みがちになった。妙にだるくて、朝起きられなくなった。結局、仕事も辞めることになった。そして、2週間前かな、俺がまゆゆのフェイスブックを見ると、まゆゆが結婚を報告していた。俺より顔の整った金持ち。これが世の中か。そう思った。もともと、化学や工学が好きで、趣味で色々な薬品や部品を揃えていた俺は、爆弾をつくることを思いついた。首吊りなんかも考えたが、最後くらい、俺らしく死のう。そう思った。……まあ、話すことはこのくらいだな。このスマートフォンを発見してくれてありがとう、どこかの誰かさん。それじゃあ……、

本田、最後の言葉を考える。

本田 （しばらく考えた結果）……あばよ。

本田、最後の言葉が「あばよ」であったことに関して、なにかしつくりこない様子。

本田 ……すまない、「あばよ」はイマイチだったな。……グッビヤイ。

最後の言葉を嚙んだことになんかへこむが、

本田 ま、ま、いいか、別にグッビヤイでも……。

本田、再びスマートフォンを操作する。

本田 よし、ここに番号を入れれば爆発する。……押すか。……押す。……ああ、押すよ俺は。

本田、押さない。

軽く深呼吸する。

本田 ……あ、家の鍵閉めてきたつけ。

沈黙。

本田 違う、関係ねえよ、どうせ死ぬんだから。そう。……パソコン……。警察に履歴とか見られんのかな……。男には異常な性癖があり、とか……。

少し沈黙。

本田 死ぬんだよ。そのあとのことなんか、

軽く深呼吸する。

本田 ……さくつとやろう、こういうのは、意識すると  
できなくなるから、何気なく、あ、気づいたら押しち  
やった、みたいな感じで、……爆死して、このスマー  
トフォンのボイスメモ発見してもらって……、え？

少し沈黙。

本田 これ、爆発でスマートフォンぶっ壊れるな、

少し沈黙。

本田 あそっか、爆発に巻き込まれないくらい遠くで起  
動すればいいのか。じゃあ俺も死なないな。

頭を抱えてしやがみこむ。

本田 ……考えろ、考えろ、

外から声がきこえてくる。

鈴木の声 はあー、なかなか雰囲気あるねー。

本田 やべ、誰だ？ くそっ……隠れるか。

本田、いったん隠れて様子を見る。

鈴木が現れる。

鈴木 うーん、やっぱ廃屋って雰囲気あるなあ。うんう  
ん、いい感じ。よし、自殺するのはここにしようかな。  
ええと、水筒水筒……

鈴木、カバンから水筒を取り出して、中身を飲むとする。

本田 （出てきて）ちょいちょい、あなた。

鈴木 わ、あ、すいません、え？

本田 あのー、困るなあ。ここ、僕の場所なんですよ。

鈴木 あ、えーと、家主さん？

本田 や、家主じゃないすね。僕がここに住んでるよう  
に見えます？

鈴木 いや、さあ。

本田 あのね、ここは僕が見つけたんですよ。それをあ  
なたノコノコやってきて、（悪意のあるモノマネ）ウン、  
イイカンジ。ウン、イイカンジ。ココニシヨウカナー。  
冗談じゃないですよ。

鈴木 誰？ 今の誰？

本田 あなたでしょう。（悪意のあるモノマネ）ウン、ウン、  
イイカンジ。イイカンジダナー。

鈴木 そんな妖怪みたいじゃなかったでしょう。

本田 僕にとっちゃ妖怪ですよ。妖怪ヒトノバシヨヨコ  
ドリーですよ。

鈴木 きいたことないですよ。

本田 その水筒は？

鈴木 え、……コーヒーですよ？

本田 コーヒーなわけないでしょう。

鈴木 なんてあなたが決めつけるんですか。

本田 なにか入ってるでしょう。

鈴木 ま、砂糖とか入ってますけど。

本田 青酸カリとか。

鈴木 なんでコーヒーに青酸カリ入れるんですか。

本田 じゃあトリカブトだ。

鈴木 砂糖ですって。

本田 わかった、フグか。フグだ。乙なもんだな。

鈴木 コーヒーにフグって合うんですか？

本田 知らないよ。没収。

鈴木 やですよ。ただのコーヒーですよ。

本田 ただのコーヒーで人間が死ぬと思いますか？

鈴木 はい？

本田 ただのコーヒーを飲んで人間が死ぬんですか？

鈴木 死なないでしょうね。

本田 なんなんですかあなたは。

鈴木 ……いや、こっちのセリフなんですけど。

本田 とにかくどっか行ってください。ここで死ぬのは

僕なんです。

鈴木 ……はい？

本田 ？

鈴木 死ぬんですか？

本田 あなたもでしょ？

鈴木 私が……？

本田 だってさつき、「自殺するのはここにしようかな」  
って。

鈴木 あ、ああああ。違います違います。

本田 はい？

鈴木 あの、うーんと、……、私、作家なんですよ、作家。今度の小説で、登場人物が自殺する場所はどうな  
感じのところがいいかなって思っで、で、取材がてら、  
散歩してたらここ見つけて、あ、ここいいなあって。

本田 ……あ、ああなるほど、へー。

鈴木 えっと、自殺なさる……？

本田 ……そんなこと言いましたっけ？

鈴木 はい。

本田 ……僕も小説を書いてて。(改めて見まわして)あー、  
この辺で主人公が死ぬといいだろうなあ。

鈴木 いいですよそういうの。え、死ぬつもりだったの？  
なんでなんで？ なんで死ぬの？

本田 なんでちよっと嬉しそうなんすか。

鈴木 教えてくださいよ、ネタになるかもしれないじゃ

ん。早く早く、

本田 人が死ぬのネタにするなよ。

鈴木 ほら、ちょうだい。

本田 ちょうだいってなんだちょうだいって。

鈴木 もったいぶってるとハードル上がりますよ。いんですか？　すごい期待しますよ？

本田 ……わかりましたよ。

鈴木 ほんと？

本田 でも、別につまんない話ですよ。

鈴木 大丈夫、面白くするから。

本田 勝手に面白くすんなよ、

鈴木 うん、で、なに？　ちょうだい。早く。

本田 女ですよ。

鈴木 うわ、出た、女。修羅場でしょ、修羅場。

本田 そんなんじゃないくて、……ただ女に振られたってだけです。

沈黙。

本田 ほら、つまらない話でしょ。

鈴木 つまんない。

本田 つまんないってなんだよ。

鈴木 だって……ええ？

本田 なんだよ。

鈴木 ちょっと、……予想以上につまんなかった。

本田 真剣なんだこっちは。

鈴木 これは……ちょっと小説のネタにはならない。だってつまんないもん。

本田 じゃあ勝手に面白くすりやいいでしょ。

鈴木 ならない、これは面白くならない。

本田 お前に俺の苦しみはわかんねえよ。

鈴木 出た。「お前にはわからない」。言うんだね。実際言う人いるんだね。

本田 どっか行けよ。

鈴木 え、ほんとに？　ほんとにそんな理由で死ぬの？

本田 文句あんのかよ。

鈴木 だって、……女に振られただけじゃ人は死なない。

本田 死ぬんだよ。

鈴木 死なない。

本田 じゃあ俺はなんなんだよ。

鈴木 だから死なないって。絶対思いとどまる。

本田 本気だぞ俺は。このスマートフォンに番号を入れたら、このカバンに入ってる爆弾が爆発するんだよ。

鈴木 あー、どうせ押せない。

本田 押すぞ、本気で押すからな。

鈴木 あーはいはい。はい、しまってますよ。

本田 や本当に、これマジで押すから。

鈴木 あーはいはい、しまってますよー、はい、ポケ

ットにしまったー。

本田 そういうなあなあな感じで止めんなよ。

鈴木 うん、わかった、あんた頑張ってる。でも今日は違うね。うん、また日を改めて。

本田 そのテキトーな感じやめろよ。噛み合っていないだよ俺とお前のテンションが。

鈴木 飲みに行く？ タクシー呼ぶ？

本田 行かない。マジでほんと、どっか行って、お願いだから。

鈴木 うんわかった、いったんね、いったん。またちよつとしたら戻ってくるから。いったんね。じゃ、お疲れ。

本田 お疲れじゃないよ。

鈴木 またね。

本田 おう、またな。……「またな」じゃねえよ、死ぬんだよ。もう死ぬんだよ俺は。

鈴木は去っていった。

本田 なんだよくそ、バカにしやがって。……ああくそ、全然死ぬテンションじゃなくなっちゃったよ。……ダメだダメだ、何言ってるんだ、死ぬんだよ俺は。ここまで準備してきたんだぞ、今更全部ムダにする気か俺は。押すぞ、押す……押すんだ俺は……。

声がきこえてくる。

松田の声 こっちだ、ぐずぐずすんな。

本田 また誰か来た、くそつ、隠れるか。

本田、いったん隠れて様子を見る。

泉を連れた松田が現れる。

泉は目隠しをされ、手を縛られている。

松田は拳銃を持っている。

松田 よし、おとなしくしろよ。目隠ししてて見えねえと思うけど、俺は拳銃持ってるからな。騒いだら撃ち殺すからな。

松田、電話をかける。

松田 ……おう、もしもし、トヨダ・ソリューションズのトヨダ社長だな。いやなに名乗るほどの者じゃないんですがね。お宅のお嬢さん、家に帰ってきてきてないでしょう。いないはずですよ、ここにいるんですから。ん？ 確認する必要なんかありませんよ、だってここにいる、(いったん保留にされたらしく、舌打ち) ……(少し

して「グリーン・スリープス」の鼻歌を歌う）だいたいこれなんだよな保留の音つて。……（相手が戻ってきたらしい）おう、お嬢さんがいねえのわかっただろ。身代金なんだがね、現金でじゅ、え、いた？ いや、いないよ。だって、ここにいるんだもん。いや、バカにしてないです、はい、いや本当ですって、わかりました、声きかせます、はい、え？ ああ、まあ、似た声の人かもしれないですからね、はい、じゃあ、はい、写メ送ります。ほんとに、ちよつと待ってください、はい、ええと、目隠しとつて……

松田、泉の目隠しをとる。と、松田の知らない人。

松田 え？ ……あれ？ 誰キミ？

泉 ……。

松田 あ、すみませんお待ちいたしました。はい、先ほどの誘拐の件だったんですけど、なんかあの、はい間違えました。はい、あ、通報とかちよつと、はい、あれなんで、はい、あの間違いなんで、はいすみません、はい、はい、二度とこのようなことが、ええはい、善処いたしますんで、はい、はい、失礼します、大変申し訳、はい、はい、ええはい、すみません、はい、はい、はい。（電話を切る）

なんとなく見つめあう松田と泉。

松田 ……あの、トヨダ・ソリューションズのお嬢さん、泉 じゃないです。  
松田 あー。

沈黙。

松田 え、よく似てるとか言われませんか？

泉 知らないです。

松田 ……親戚？

泉 いえ。

松田 ……誰だよ。

泉 泉です。

松田 誰だよ。

泉 泉好実です。

松田 きいてねえよ。

泉 ……えつと、ちよつと確認してもいいですか。

松田 ダメです。

泉 ……あの、もしかして、間違えて、

松田 しゃべるな。

泉 間違えて、

松田 やめろ。

本田、クシヤミをしてしまい、松田に気づかれる。

松田 誰だ、

本田 やば、

松田 何だお前、来い。

本田、松田に引きずりだされて、泉の横に座らせられる。

松田 おい、見てたな。

本田 見てないです。

松田 いや見てたな。

本田 見てないです。

松田 この拳銃見える？

本田 見えました、はい、すいません。

松田 正直に答えろ。

本田 はい。

松田 どう思った？

本田 はい？

松田 今の一連の流れ、どう思ったんだよ。

本田 「ないなー」って思いました。

松田 おらあ！（本田をけり倒す）

本田 いてえ！ 正直に言うから……。

松田 なあ、仕方ないよな？

本田 はい？

松田 殺されても仕方ないよな、お前。

本田 待ってくださいよ……。

松田 大丈夫、こいつ（泉）も殺すから。

本田 その人関係ないじゃないですか。

松田 だってもう、知っちゃったからな、一連のこれを。

本田 あなたが悪いんじゃないですか。

松田 （泉に）なあ、どう思った？ 一連のこれ。

泉 これはないなー。

松田 うん、殺す。

本田 待ってくださいよ。

松田 で、俺も死ぬ。心中ですから、これは。

本田 いやー生きてればいいことあると思いますけどね

え……。

松田 （泉に）おい、なにか最後に言い残しときたいこと

あるか？

泉 あつと、ちよつとすぐには……。

松田 うん、じゃあ30秒やるから考えて。（本田に）お

前も、最後の言葉考えとけ。

本田 そんなあ……。

松田 はい、はじめ。

泉は考える。

本田はどうしていいかわからず、松田や泉になにか訴えかけたさそうにそうにしているが、二人ともきいてくれなさそうである。



泉 あの、

松田 決まったか。

泉 あなたは、なんて言うんですか。

松田 ん？

泉 決まってるんですか。最後の言葉。

松田 ああ、そうだな。「俺の人生、ひとつだけ間違いがあつたとすれば、それは、この世界に生まれてきたことだな。」かな。

泉 (吹き出す)

松田 バカにしたか今。

泉 参考にします。

松田 バカにしたよな今。

本田 刺激しないでくださいよ。

松田 お前どう思った。

本田 はい？

松田 今の言葉、どう思った、なあ？

本田 や、はい、素敵だなあつて。

松田 いやあの正直に。正直に。

本田 「痛いなー」って思いました。

松田 おらあ！（本田をけり倒す）

本田 いてえ！ 正直に言うから……。

松田 (泉に) おい、バカにしてるみたいだけど、お前はなんて言うんだよ。

泉 その時に言いますんで。でも絶対あたしの方がインパクトあるんで。

松田 求めてねんだよインパクトは。あーもう30秒経ったよ。おわり。おしまい。ほら言え。

泉 いやどうぞそちらから。

松田 俺さっき言ったじゃん。

泉 あれはだつて、リハーサルですから。

松田 リハーサルってなんだよ、リハーサルとかねえんだよ別に。

泉 はい、どうぞどうぞ。

松田 わかったよ。……これが世界か。ま、悪くはなかったかもしれないな。

本田 ……変えました？

松田 文句あんのかよ。

本田 いやー、だつてさっきの言うと思ってたから……。

松田 やめたんだよ。なんか評判よくなかったから。

本田 ……。

松田 (泉に) ほら、じゃあ次はお前だよ。お前俺より本当にインパクトあるんだな。今ハードルすげえからな。マジで。はいどうぞ、3、2、1、はい。

泉 ……お母さん、こんな娘でごめんなさい。私、リュウヤと結婚するって言ってたのに、結婚式で幸せな姿を見せるからって言ってたのに、実現できなくてごめんなさい。ケンカして別れることになったって言った

けど、あれは本当は嘘です。気づいたら私のためていたお金を全部とられていなくなっていました。覚えてる？ お母さん。一生治療が必要な病気にかかってしまったといつて月々15万送ってもらっていたけど、あのとき見せた診断書は私が偽造したものです。リュウヤに貢いでいました。ときどきお母さんに生活費が足りないといつてお金を送ってもらっていました。お店での成績が悪い時にリュウヤに貢いでいました。リュウヤをナンバーワンにしたかったからです。車で事故つて示談のために100万必要だつて言ったこともあったよね。あれもリュウヤに……

松田 あー……。おわり。

泉 あと6つくらいあるんですけど。

松田 もういい。お母さんかわいそう。

泉 インパクトありましたか？

松田 うん、あった。お腹いっぱい。

泉 じゃ、もういいです。

松田 (本田に) うん、じゃあお前。

本田 はい？

松田 最後の言葉。

本田 あ、はい。あの……、その、リュウヤというのは、本当に悪い男ですね。もう最低です。ですがその、わたくしは、お金ありませんし、仕事もしておりません。しかし、心、心だけは善人の心を持っております。

ですからその、わたしなんて、どうでしょう？

松田 ……え？ なに、いま告白したの？

本田 告つてませんよ、質問をしたんじゃないですか。私はどうですか。

松田 「告る」とか言うなよいい大人が。

泉 いやー、無理っす。

本田 無理ですか……。

松田 だらうね。

本田 ちなみに、どこが無理なんでしょうか？

泉 顔。

本田 顔かあ……。

松田 なに結構ショック受けてんだよ。

本田 えほんと無理っすか？

泉 無理っす。

本田 なんなら、整形とか考えますから。

泉 あーもう早く殺してくださいこの人。

本田 なんですかその態度は。歩み寄ろうとしてるんですよこっちは。

松田 なんでお前が怒んだよ。

本田 結局顔か？ え？ イケメンがいいのか？ え？

おい。なんとか言ったらどうなんだよ！ (泉に襲いかかる)

松田 おい、何襲いかかろうとしてんだ！ やめろ！ やめろ！ おらあ！ (本田をけり倒す)

本田　いてえ！

松田　この人に近付くなお前は！

本だ　……あんたはそいつの味方か！

松田　お前の味方じゃねえことだけは確かだよ。

泉　（ささやくように小声で）死ね。

本田　（また襲いかかろうとする）お前今「死ね」って言ったか！　え？　小声で死ねって言ったか！

松田　やめろお！（本田をけり倒す）

本田　いてえ！

松田　キミ、大丈夫？　起きれる？　ああごめんごめん、腕縛ってたね。ほどうてあげるよ。うん、大丈夫、大丈夫。はい、はい。（縄をほどうてあげる）

本田　なんでそんなヤツに優しくしてるんだ。

松田　優しくするのに理由なんていらねえよ。

本田　……イケメンかお前は。

松田　（泉に）あー大丈夫ー？　痛かったねー？

本田　見せつけるな。俺に、見せつけるな……。泣き出す）

松田　あーもう、いい？　最後の言葉。はい、もう終わり。もう、死のう。もう、サクッと。もう撃っていい？

本田　待てよ……。

松田　なに。

本田　あんた警察かなんかか？

松田　……いや。

本田　撃ったことあるのか銃を？

松田　……初めてだな。

本田　初心者か、一回で急所を当てられると思うか？

松田　さあ。

本田　どうせちよつと外すよ。ああ痛い、痛いけど致命傷にはならない、っていう、最悪のパターン。

松田　じゃあこうやって頭に密着させてコメカミに撃てばいいだろ？（銃口を本田のコメカミあたりにあてる）

本田　はいダメ。コメカミちよつとはずしてる。死なない。

松田　なんだよ、じゃあどうすんだよ。

本田　（バッグを持ってきて）ここに、爆弾があります。

松田　……。

本田　僕のスマートフォンから番号を打ち込むと、このカバンに入ってる爆弾がボン、ですよ。半径10メートルくらいはもう、消し飛ぶんで。

松田　……。

本田　どうです？

松田　……。

本田　……どうしたんです。

松田　困ってるんだよ。リアクションに。

本田　「よくやった」、じゃないですか。普通に。

松田　……えっと、きいていい？

本田　あ、ちゃんと死ねますよ、はい。

松田 いや、……なぜ、爆弾を……？

本田 あ、これですか、死のうと思つて。

松田 ……。

本田 でも、一人だと怖いですけど、こうやってみんなと一緒に死ねるつて思うと、なんだか、嬉しいですね。  
ええと3，6，

松田 待つて。え、……もう数字入れてるの。

本田 はい、もう、すぐですから。

松田 一回待とう。一回。ね？

本田 ほんとに死ねますよ。

松田 ちよつと、……心の準備が。

本田 さっき言つたじゃないですか、最後の言葉。

松田 そうだけど、最後の言葉のあとにけっこう喋っちゃつたし。

泉 ちよつといいですか？

松田 はい、はい、

泉 私は、その拳銃でお願いします。

松田 え？

泉 この人と一緒に死ぬの、嫌です。

本田 てめえ！（泉に襲いかかろうとする）

松田 おらあ！（蹴り飛ばす）

本田 いてえ！

松田 あの、でも、俺、拳銃撃つの初めてだから。

泉 死ぬまで撃つてくれればいいですから。

松田 いやあ……。

本田 わかりました。じゃあ私がこいつを撃ちます。

松田 なんでかなあ。

本田 バイオハザードとか得意だったんで、大丈夫です。貸してください。

泉 死ね。

本田 はつきり言つたな。死ぬのはお前の方なんだよ。その拳銃貸せ。こいつは殺さないとダメだ。

松田 おらあ！（蹴り飛ばす）

本田 いてえ！

松田、本田に拳銃を向ける。

本田 おい、なぜ俺に銃口を向けるんだ。そいつ（泉）

だろ殺すのは。

松田 もう、人間として許せない。

本田 犯罪者が人間気取りか。

松田 俺もびつくりした。俺つて、まだ正義感とかあるんだなつて。

本田 人間のクズの分際で。

松田 それ以上近づいたら本当に撃つ。

本田 本望だよ。もともと死ぬつもりだったんだから。ほら撃てよ。

松田 そう言われると撃ちたくなるんだよなあ。

本田 人間のクズだったらクズらしく、挑発されたらすぐカッとなつて、暴力ふるつて、その責任を社会に押し付けろ。人のこと人だと思わずに殺して、社会が悪いとか言え。

松田 お前の方がだいぶクズだよ。

本田 やんのかお前。いいか、俺がこうなつたのは俺のせいじゃない。社会が悪いんだ。

松田 自分で言っちゃってんじゃない。すげえクズじゃないお前。(泉に) ねえ？

泉 どっちもクズだよ。

松田 だな。俺もクズだな。もういいよ。爆発させて。

ドン、爆死、おしまい。

本田 嫌だ。

松田 ……なんで？

本田 お前の指図は受けない。

松田 なにそれ……、ガキか。

本田 社会が悪い。

松田 また出た。

本田 懇願しろ。土下座して。爆死させてくださいって。

松田 ……わかった、やっぱり撃ち殺す。もう、今ならすつと撃ち殺せる気がする。じゃ、あの世で会おう、さよなら。

鈴木が現れる。

鈴木 はい、はい、ストップ、はい。

松田 ……誰だよ。

鈴木 違う。もったいない。

松田 誰なんだよ。

鈴木 緊張感が足りない。グダグダ。

本田 あの俺たちもう死ぬんで。

鈴木 だからこそでしょ。あんたたち死ぬってことがわかってない。死ぬってもっとこう、……ドラマチックでしょ？ そういうグダグダな感じで死ぬのは、違う。

松田 誰なんだよ。

本田 さっきもいたんですよこの人。

鈴木 このコ(泉)だってさ、せっかく最後の言葉言い終わってたのに。ダラダラ生き残ってるしさ。

本田 なんか作家らしいんですよ、この人。

鈴木 そう、だから、もうちょっと真剣にやってほしいんですよ。そしたら書きますから。

松田 別に書いてもらわなくてもいいんですけど。

本田 あんた本当に作家なんですか。見たことないですよ。

鈴木 まあ、そんなにメジャーじゃないですから……。

本田 え、なんていうんですか、名前。

鈴木 鈴木ですけど。

本田 いや、鈴木じゃわかんないです。

鈴木 鈴木美智子です。

本田 鈴木美智子？ あ！ え、鈴木美智子って、あの、「コンビニ列車」の鈴木美智子さんですか。

鈴木 え、ご存じなんですか？

本田 読みました。すごい良かったです。

鈴木 え、ほんとですか？

泉 あ、あの、私も読みました。

鈴木 え、ほんと？

泉 「コンビニ列車」もそうですし、あと「火花のスクラップ」も。

鈴木 えーほんと？ 嬉しい。あなたは？

松田 ……いや、あの、すいません。

泉 本とか読まなさそうですもんね。

本田 だから誘拐とかしちゃうんだよ。

松田 ……すいません。

本田 あの、握手してもらっても。

鈴木 ええ、もちろん。（握手する）

本田 うわーありがとうございます。

泉 あの、あたしも。

鈴木 ええはい。（握手する）

泉 あー嬉しい、もう死んでもいいです。

本田 もう死ぬんだけどね。

三人 あははは。

松田 なんか仲良くなってるじゃない？

泉 鈴木美智子が好きな人で悪い人はいないです。

本田 あの「コンビニ列車」でさ、山岡がわざと発注の端末落として壊すところあるじゃないですか、

泉 あれわかるー。

本田 俺もわかるー。

鈴木 あそこ私も思い入れあるんですよー。

本田 あそここのくだり本当よかったです。

泉 すごいあたしのこと書いてるって思いました。

鈴木 ほんと？ よかった嬉しい。

本田 あの、さっきの、なんか死ぬとか死なないとかやっていたくだり？ 僕もなんかちよつと違うなってるって思ってたんですよ。

泉 あたしも思った。死ぬってこういう感じじゃないよね。

鈴木 あんまり文学的じゃなかったよね。

泉 （松田に）だからやっぱりさ、あたしが最後の言葉を言い終わった時点で、あたしのこと殺さないといけなかったと思う。

松田 え、俺？

泉 だって、あたし死ぬと思って、懺悔する気持ちで赤裸々に語ってたのに、あそこで死ななかったら、なんか、文学的じゃない。

松田 文学目指してないから。

鈴木 で、なんかこのコの縄外しちゃってるじゃない。

これは、ないね。

泉 いや、ない。ほんとない。(松田に) あたし逃げちゃうよ？ いいの、逃げちゃうよ？

松田 よくないけど……。

本田 え、ずっと見てたんですか。

鈴木 けっこう最初から見てた。

本田 やっぱ観察って大事ですもんねー作家って。

泉 どういう感じだといいですかね？ さっきのくだり。

鈴木 全体的にちよつと喋りすぎて感じかな。

本田 喋り過ぎかあ。

鈴木 やっぱ文学つてもうちよつと静かなんだよね。たまにセリフばかりの手抜き小説みたいなのあるけど、あれはやっぱりダメだね。演劇の台本じゃないんだからって感じ。え、ちよつとやってみて。あの、キミ(本田)がそこにいてさ、

本田 本田です。

鈴木 うん、本田くんがさ、そこで物音たてちゃって、

その誘拐犯に気づかれるところ。

本田 あ、そこから見てたんですか。

鈴木 うん、見てた。

本田 やっぱ作家は違うなあ。ここですね。(位置につく)

泉 (そのときにいた場所に座って) 私ここでいいですか？

鈴木 うん、そうだね。

松田 ……。

本田 ちよつと、はい、誘拐犯ここ。(松田を位置につける)

松田 (不満げに) ……はい。

鈴木 うん、いいね。じゃ、ちよつとくしゃみしてみて。

本田 はい。(くしゃみする)

松田 ……。

鈴木 はいくしゃみ聞こえたよ、どうすんの？

松田 あ、すいません、……誰だ、

本田 やば、

松田 (見つけて) 来い。

本田、松田に引きずりだされて、泉の横に座らせられる。

松田 見てたな。

本田 見てないです。

松田 いや見てたな。

本田 見てないです。

松田 この拳銃見える？

本田 見てました、はい、すいません。

鈴木 うん、ありがとう。ちよつと文学じゃないなあ。

本田 あー、僕もちよつとしつくりきてないですね。

鈴木 ちよつと違うのやってみて。

松田 (少しして自分に言ってることに気づく) あ、俺っすか？

泉 ぼーっとすんなよ。

松田 ……はい。

鈴木 ちょっと別の感じで、もう一回。はいどうぞ、くしゃみ。

本田 (くしゃみする)

松田 おいおいなんだおい、くしゃみが聞こえたな。ってことは？ 誰かがいるってことだな。おい出てきたらどうなんだ、俺を誰だと、

鈴木 違う、

本田 違う、

泉 違う、

松田 違うのかよ。

本田 文学じゃない、

泉 センスない、

鈴木 あのね、きいてた？ 私最初に「喋り過ぎ」って言ったじゃん。ちよつと、今のくんだり一切喋らないでやってみてもらえる？

で、コメカミに銃突きつけて最後に一言「なあ、女は好きか？」って言うてみて。じゃあもう一回物音。

本田 はい。(くしゃみ)

松田、ししゃべらずに本田を捕まえ、泉の横に倒す。

本田のコメカミに銃口をつきつける。

松田 ……なあ、女は好きか？

鈴木 ……(嘆息) いい。文学的。

本田 いいですねこれ。

泉 さすがです。恐れ入ります。

鈴木 どうだった？

松田 ……まあ、悪くはなかったかな。

本田 なんか、すごい希望が見えてきました。

泉 最後まで緊張感保って、文学的な最期を迎えましょう。

鈴木 けっこう長丁場だよ、小説なんて一日や二日じゃ書けないからね。

本田 や、もう何日かかっても大丈夫なんで。

鈴木 ちよつと休憩してご飯とかにしようよ。コンビニとかあったつけ？

本田 いやー、歩いたら30分くらいかかるんじゃないですかね。

泉 この人(松田)、車だよ。

松田 ああ、まあ。

鈴木 あ、じゃあ私ここに残ってアイディア練つとか、お弁当とかお菓子とか。(財布からお金を出そうとする)

本田 あー僕出しますから。

鈴木 本当？

本田 もうはい、大丈夫です。

泉 じゃあ買ってきます。好きなものとかありますか？

鈴木 ー、牛カルビかな。あと、お菓子多めで。あ、お酒も少し。



泉 わかりました。

鈴木を残して三人は去り始める。

松田 さつきのさ、「なあ、女は好きか？」ってどういう意味？

泉 さらにわれた女と無理やりなにかやらせるのかなあとか、一緒に殺すのかなあとか、読者の想像がひろがって緊張感が保たれるでしょ。

松田 あ、なるほど。作家ってすげえんだなあ。

## 2

それから少し時間が経った。

食べ物や酒が床に広がっている。

みんな少し酔っぱらっている。

本田 ほんとなんなんだろうって思いますよ、大学出て資格までとったのに、一級建築士ですよ、一級建築士。二級じゃなくて一級ですよ。

泉 そんなすごい人だったんだー。

本田 すごいんですよ。

松田 あんた偉いよ！

本田 松田さん。わかってくれますか僕の気持ちを。

松田 わかる、俺も振られたことある。女ってほんと勝手だよな。

鈴木 でも、だいたい原因は男だからね。

泉 そつすよほんとに。

本田 ほんと何もしてないんすよ僕。

泉 だって男らしくないじゃん。

松田 出た、「男らしくない」、むかつくわあ。

本田 むかつきますよねえ！

泉 だって、男は男らしくいてももらわないとさあ。

松田 「お前女子力ねえなあ」って言われたらむかつかない？

泉 むかつく、ってかそれ会社で言われた。

本田 それと同じだよ。

泉 それは違うんだって、だって毎日深夜まで働かされて、女子らしさとかに使う気力が残ってないから。

鈴木 泉ちゃんなんの仕事してんの？

泉 まあ、小さい広告代理店ですよ。

鈴木 すごいじゃん、ザ・リア充職じゃん。

泉 全然もう、掃き溜めですよウチは。

本田 なんか広告とか作ってんの？ 俺見たことあるかな。駅にある広告とか？

泉 あーそういうのはもっと大きなところが持つてちや

うから。もっとちっちゃい企業の、……あのさ、太るバイトって知ってる？

松田 なにそれ？

泉 一か月で10キロ太ったら20万。

本田 なにそれ、なんかの実験。

松田 わかった、治験。

泉 ブー。ダイエット食品のモデルのバイト。

鈴木 ダイエット食品のバイトだったら痩せなきゃダメじゃん。

本田 太ったら宣伝になんないじゃん。

松田 (気づいて) うわっ。あ、わかった。わーそうか、マジか。

鈴木 あ、そうか。

本田 え、なにになにどういうこと？

松田 だから、逆に使うんだよ、写真を。

泉 そう。

本田 え、わ、わー。

泉 ビフォーに太った写真載せて、アフターに痩せてる時の写真載せるのね。

鈴木 深い。闇が深い。

泉 そんな仕事してるとき、あたしがお金をもらっているこの仕事はいったいなんだろう、精神と体力削ってつくっている私のこれは、いったいなんなんだろうってさ。それで今日、急に目隠しさせられて、車に乗せ

られて、ああそうか、もう会社いなくていいんだ、もうこんなことしないでいいんだって。

本田 ……辞めようって思わなかったの？

泉 ああ、もちろん何回も思ったけど、でもあたしがいなくなったらみんな困るだろうし、あたしがもっと効率的に仕事すればいいだけかもしれないし、別に居心地悪い職場ってわけでもないし、残業代だって出るし、まあいつかって、辞めて親に説明するのも面倒くさいし、たまにリュウヤに会って思いっきり愚痴きいてもらえればそれで幸せかなって、

鈴木 それ、けっこう末期だよ。

泉 いやいや、だって別に苦しくて死にたいとかじゃないですから、

鈴木 それ、感覚マヒしてるだけだから、

泉 いやいやほんとに、

鈴木 さっき、この人(松田)に殺される感じになったじゃない、そのとき、死にたくないって、思った？

泉 あー、まあ、死にたいとか死にたくないとかっていうより、もう会社いなくていいなあとか、あたしがやってた仕事、誰がやるのかなあとかの方が強かったですね。

鈴木 末期。

泉 え、

本田 末期だ。

泉 えー？

松田 うん、おれちよつと怖いなって思った。

泉 いやいや、だって末期って、もっと追い詰められる感じにならないですか。

松田 いや、追い詰められてるよ。

泉 え、追い詰められてるんですかあかし。

鈴木 自覚ないだけだよ。

泉 あーそっか、なるほど、死にたくないって思いますもんね普通。

本田 あ、気づいた。

鈴木 それ、訴えたら勝てるから。次の仕事探した方がいいよ。

泉 ー、でも訴えるのも仕事探すのも面倒くさいですねー。(ちよつと笑ってる)

松田 え、なんで笑ってるの、怖い。

泉 え、なんで？

鈴木 いい？ あなたたちも一歩間違えたらこういう感じになるんだからね。

本田 気を付けます。

泉 松田はなにやってるの。

松田 え？ あー俺は、今はなんもしてないんだけど。

前までスーツアクターやってた。

本田 あ、あれだ、服屋とかに貼ってある写真の、松田 ー、なにと勘違いしてるのかわからないけどたぶ

んそれじゃないよ。

鈴木 ヒーローショーとかってこと？

松田 そうっすそうっす。

泉 へー。

本田 怪人とかボコボコにするんだ。

松田 いや、俺はボコボコにされる方で。でもあれ、ヒーローより怪人の方がうまい人がやるからね。

泉 そうなんだー。

鈴木 やられる方が難しいってことなんだ。

松田 そうそう、派手にキレイにやられなきゃいけないから。

本田 あーなるほど。

松田 でもなんか、あれ、俺なんで悪いことしてないのに毎回やられてるんだろって、妙に引くかかるようになっちゃって、急にモチベーション下がっちゃって、泉 それでやんなっちゃって辞めたんだ、

松田 いや。よく一緒にやってたヒーロー役のやつが妙に調子こいたやつでさ、よく台本にないことやって怪人に必要のない攻撃とかしてたんだよ。俺も危ないからやめろって何度も注意してたんだけど、その日の舞台も、仲間の怪人に、プランにない飛び蹴りをしてさ、それで、そのアクターが明らかに様子がおかしいわけ、怪人のスーツ着て表情とかはよくわからなかったけど、あれはきつい怪我したなって俺にはわかった。そのと

き俺は気づいたんだよ。悪はこいつじゃないかって。倒されるべきなのはこいつじゃないかって。そのあとのことはよく覚えてないんだけど、どうやら、そのあとのシーンで、俺、そのヒーローのアクターを、舞台の下に投げ飛ばしたらいいんだよ、一本背負いで。で、命に問題はなかったけど、腰を思いつきりやっちゃったらしくて。それでもう、俺もいられる雰囲気じゃなくなってるさ。保険入ってたから、賠償金はなんとかあったけど、なんだか不思議に思ったなあ。悪ってなんなんだろうって。

泉 その調子こいてるやつが悪いんですよ。

本田 鈴木さんは、やっぱり小説だけで生活してるんですか？

鈴木 小説書くだけで生活できてる人なんてほとんどいないよ。

本田 じゃあなにかほかにお仕事を。

鈴木 コンビニ。

本田 ……あ、へー。

鈴木 でも、いろんな人が来るから、けっこう勉強になるよ。

泉 『コンビニ列車』もコンビニの話ですもんね。

鈴木 そう、週5で8時間。時給1100円。月収いくらだと思う。

泉 ……15万くらいですか？

鈴木 一か月で22日働いたとして、193,600円。所得税と年金、健康保険引かれて手取り16万くらい。やってらんないね。もちろん原稿書いてお金もらうようなこともあるけど。

松田 しんどいですよね。

鈴木 まあね。……よし、今の話聞いてて、こう、みんなが死ぬ構想がなくなるとは固まってきたな。

泉 えー、きかせてください。

鈴木 いやでもまだ最後がねえ。こう、人間にとって幸せな死に方ってなんだろうなあって。

本田 え、僕たち幸せに死なせてもらえるんですか。

鈴木 まあやっぱり幸せな方がいいんじゃないかなーって、こうやって協力してもらえるわけだし。

泉 いや協力してもらってるのはあたしたちの方ですよ。鈴木 本田はさ、なんで爆弾で死のうと思ったわけ。

本田 ええ？ あー、まあ、なんか自分らしい死に方がいいなと思ってる。僕、爆弾とか作んの好きなんです。

泉 自分らしい死に方かあ。その発想はいいなー。

鈴木 泉ちゃんはどう死にたい？

泉 あー、でもやっぱりリウウヤに愛してるよって言うわねながら死にたいなあ。

鈴木 ほか。

泉 厳しいなあ。でも、笑いながら死ねたら幸せですかね。あはははは、あはははは、あはははははー！ (松

田 あ、撃っていいですよ。あははははーあははははー！

松田 え、怖い、やだ、この人思った以上にやばい。

鈴木 泉ちゃんにとって「自分らしい死に方」ってなに？

泉 うーん、本田さんみたいに特技とかあるわけじゃないしな、

鈴木 好きなものは？

泉 リュウヤ。

鈴木 ほか。

泉 うーん、これといつて趣味もないんですよ。だから、自分らしいっていわれても、あたし、なんなんでしょうね。あれ、（涙が出ているのに気づいて）あ、すみません。なんか涙が……あー、あれ、とまんない、ごめんなさい。

沈黙。

松田 ……死ぬ必要、あるんですかね。

鈴木 （松田を見る）

松田 なんかこのまま死ぬのはよくないと思うんですよ。その前に、なにかやっておかなきゃいけないんじゃないかって。

本田 道德の教科書かお前は。

松田 いや、そういうんじゃない。

本田 ダメだよ今更。

松田 そうじゃなくて、このまま虐げられたまま終わっていいのにな。泉ちゃんの涙とか、俺の怒りとか、本田の悔しさとか、このやり場のないエネルギーを抱えこんだまま死ぬのは違うんじゃないかって。だって、死ぬべきなのは俺たちなのか？

鈴木 （松田を見ている）

松田 掃除機のパックあるじゃん。吸い込んだゴミがたまってる、いっぱいになったら捨てられんのね。俺たちってさ、今、掃除機のパックになろうとしてるんじゃない？

本田 ちよつとその例えピンとこない……。

松田 だから死ぬべきなのは俺たちじゃなくてさ、

泉 あー！

少し沈黙。

泉 やだ、あたしは掃除機のパックなんかじゃない。違う。違う。

松田 な、そうだろ？

鈴木 あー！

本田 え？

鈴木 私だって掃除機のパックなんかじゃない！ やだあ、もう働きたくない！

本田 鈴木さん？ あれ？ 急に酔っぱらったかな？

鈴木 酔っぱらってない、酔っぱらってないもん！

本田 いや、酔っぱらってますって。

松田 でも俺たちはさあ、今、その掃除機のパックになるうとしてるんだよ。

泉 あー、破裂してやりたい、破裂してゴミまき散らしてやりたい、

松田 ……そうだよ、まき散らすんだよ、抱えたものを。

泉 そうだよね……

松田 今までで一番いい顔してるね。

泉 思い出しました。就活で、絶対広告代理店に入ってやるんだって思った、キラキラしてたあの時期のこと。今、あのときと同じ気持ちです。

松田 そうか、

泉 よし、私たちの人生の目標のために、みなさん、頑張りましたよう！

鈴木 おー！

本田 ちょっとみなさん？

泉 ほら本田も！

みんなで「えい、えい、おー！」と言う。

本田はややついていけないが、なんとかのつていく。

泉 では、会議を始めます。

本田 会議？

泉 今回の企画のコンセプトは「いかにして我々のやり場のない思いを、我々を虐げてきたもの達にぶつけられるか」です。

本田 完全に仕事モードじゃないっすか。

泉 そこ、うるさい。

本田 すみません……。

泉 では、意見のある人は、手をあげてください。

松田・鈴木 んー……

本田 ……あ、じゃあはい。

泉 はい本田さん。

本田 実名で遺書を書くというのはどうでしょう。

泉 詳しくお願いします。

本田 死ぬ前に遺書を書くんです。その中に、我々を虐げてきたやつらの実名を一人残らず書くんです。そうすると、なんかこう、警察とかがその人のこと調べたりとか、するんじゃないでしょうか……？

鈴木 はい。

泉 鈴木さん。

鈴木 甘いと思います。私たちが今まで感じてきた惨めさとか怒りとか、そして死ぬという結果と、つり合いが取れていないと思います。

泉 では鈴木さんは何をするのがいいと思いますか？

鈴木 うーん……、

松田 はい。

泉 はい、松田さん。

松田 やはり、……我々と同じ結果になってもらうって  
いうのが……、

沈黙。

泉 ……例えば、どういう方法で？

鈴木 まあ、その拳銃で、虐げてきたやつらを一人ずつ  
とか？

松田 俺は、あいつか、あのヒーローの野郎を、バンッ  
と。

本田 ……。

松田 お前は、急に別れようとか言ってきたヤツだろ。

本田 いや、まあそうなんだけど……、

松田 なんだよ。

本田 でも俺、まゆゆのこと酷い目に合わせようとか、  
思わないかな……。

松田 なんか生理的にやだって言われたんだろ。

本田 そうだけど、でもまだ好きだし。

鈴木 いい人過ぎるんじゃない？

本田 嫌いにはなれないんですね。

泉 鈴木さんは誰を？

鈴木 いや、私はそういうのないから。

本田 泉ちゃんは？

泉 うーん、そう言われると。

松田 リュウヤだろ。

泉 リュウヤは悪くない！

松田 百パーセント悪いだろ。

泉 でも、たぶんなんか事情があったんだろうし。

松田 ……もうちよつとやる気出してくれないかな？

泉 やる気はある。

本田 ある。

鈴木 かなり。

松田 じゃあそいつらに復讐してやれよ。

三人 いやあー。

松田 なにそれ、どうしたのさっきのやる気は。

泉 やる気はある。

本田 ある。

鈴木 かなり。

松田 じゃあそいつらにさ、

三人 いやあー。

松田 なんで。なんでなの。

泉 まあでも案としては、ひとまず、保留、ですかね？

本田 保留。

鈴木 保留だね。

松田 保留かよ……。

泉 ええとじゃあ、他の案。

松田 はい。

泉 松田さん。

松田 じゃあもうさあ、人通りの多いところにさ、トラ  
ックで突っ込んでさ、

泉 ……いや、それはねー、

鈴木 ……いや、いいと思うよ、

沈黙。

泉 ……ダメですよ。

鈴木 いいんじゃないかな。

泉 よくないと思います。

鈴木 なんで？

泉 人間として。

鈴木 人間らしい扱いなんてされてこなかったのに？

沈黙。

本田 俺は、やりたくないな。だって、俺その人たちに  
恨みないし。

松田 あるだろ。

本田 ないよ。

松田 社会に対してのさ、

本田 社会？ 社会ってなに？ 俺、社会から何かされ

たなんてこと一度もないよ。社会なんてやつ見たこと  
もないし会ったこともない。人間じゃないか、俺たち  
が恨みをもってるのは。特定の人間だよ。

松田 お前、自分がこうなったのは社会が悪いって言っ  
てなかった？

本田 あれは…だから、誰が悪いかわかんないから、  
とりあえず社会が悪いって言っただけでさ…。

鈴木 でもメッセージにはなると思わない？ 私たちが  
そういう事件を起こすことで、私たちを虐げた人たち  
は何か思うでしょ。それに、社会だって変わるかもし  
れない。こういう人たちが出てこないような、よりよ  
い社会をつくらうって。

泉 メッセージのために知らない人を犠牲にするんです  
か。

松田 知ってる人よりはいいと思うな。罪悪感少ないだ  
ろ。

鈴木 そう、それに、それって私たちが殺したってこと  
になるのかな、違うんじゃない？ 社会が殺したって  
ことでしよう。社会システムが生み出した不条理が、  
その人たちを殺したってことでしよう。

泉 (嫌悪感を抱いている)

鈴木 それに細かいことはいいじゃない。だって、どう  
せ死ぬんでしようあんた達。やっちゃいなよ、そっち  
の方が面白いよ。



松田 ほら、そつすよね。俺たちが悪いんじゃない、俺たちを生み出した社会が悪いんだよ。

泉 ……ゴミ。

松田 ……。

泉 他の案をお願いします。

松田 今ゴミって言ったか。

泉 何か他の案。

松田 おい、ゴミって言っただろ。

鈴木 ……まあまあ。

泉 なに銃口向けてんの？

松田 ……。

泉 ……いいよ。殺せよ。

鈴木 やめなよ。

松田 謝れ。

泉 殺せ。

鈴木 やめなつて！

泉 ……なんでも暴力で自分の思い通りにしようとして、クビになったのだって自分が悪いクセに、人のせいにして。あたしは違う、あたしは人のせいになんかしな。全部自分の責任だから。あたしは今まで全部自分の責任でやってきたから。

松田 偉そうに言うな、親から金騙し取ってたやつが。

泉 だから死んで当然なんだよあたしは。殺してよ、ほら、殺せ。

鈴木 まあまあもういいじゃない。

泉 あんたもさあ。

鈴木 ……？

泉 「あんたたちどうせ死ぬ」？ 「そっちの方が面白い」？

「ざけんなよ、一生懸命生きてんだこっちは！

低賃金のクセに！

鈴木 低賃金じゃ悪いの？

泉 手取り16万？ あたしは残業して、たっくさん残業して、月に56万もらってるんだ！ あんたなんか

よりよっぽど社会から認められてるんだ！

鈴木 金もらってる奴の方が偉いつてか？

泉 人のことただのネタだとは思ってない奴の方が偉いか！

鈴木 （松田に）もういいよ、殺してよそいつ。

泉 殺せよ。

本田 ま、そんな熱くなんないでさ。

泉 うっせんだよゴキブリ。

本田 ゴ、どこがゴキブリなんだ！

泉 臭くて人が近寄ってこないとこだよ！

本田 な、なんてこと言うんだ！

泉 臭い、近寄らないで、きしよい、

本田 きしよいってなんだきしよいって！

泉 あたしはお前らとは違うんだよ、あたしが一番責任もって自分の仕事して、一番社会に貢献してきたんだ

よ！

本田 殺せ、早くこいつ殺せ、

松田 挑発に乗るなよ、

本田 俺が殺す。その拳銃よこせ！

松田 やめろ、

本田 なんでだ！

松田 お前本当に殺すだろ、

本田 あんただって殺そうとしてただろ、

松田 そうだけど、やめろ、お前に拳銃持たせたらどうなるかわかんないから！ うわ！

本田 よし、俺のもんだ。動くなよ。……俺が殺すべきはまゆゆじゃなくてお前だ。お前みたいなの、今まで俺を侮蔑の目で見してきたヤツらだ。

泉 撃てるんだったら撃てばいいよ。どうせ人を殺す勇氣もないクセに。殺せ。こんな生きてる価値のない人間殺せ。

銃声。

本田 あ、あ、撃っちゃった。

鈴木 え、あたった……？

松田 ……いや、かすただけみたいです。

泉、急に立ちくらみがして立っていらなくなる。

うまく呼吸ができなくなり、かなり早い呼吸になり、落ち着かせようと思ってもなかなか落ち着かない。

本田 あ、あの、ほんと、撃つ気なんかなくて。

沈黙。

松田 こんなもんなんだ俺たちは……。

少し沈黙。

松田 本気で人を殺すことなんかできないし、本気で死ぬ気もないんだ。つくづく情けない……。

沈黙。

松田 ……昔から戦隊ものが好きで、俺は将来ヒーローになるんだって、そう思ってた。大人になるにつれて、現実にはヒーローなんていないんだって気づき始めた頃、スーツアクターっていう仕事を知って、ああ、これだ、そう思った。俺は運動神経もいいし、できるはずだって。人前で何かやるのも好きだったしき。最初はたくさんいる戦闘員から始まって、そのあとヒーローの役もやり始めて、ある時期、上の人たちがみ

んなやめちゃってさ、俺が悪役を任されるようになった。ま、はじめのうちは頼られてるんだなって思ったけど、やっぱり俺がなりたかったのはヒーローだったからさ。それに、俺は、あんな礼儀もなにもなっていないヒーローは許せなかったんだよ。ヒーローはあんなじゃない。あれはヒーローじゃないよ。……ま、今の俺がヒーローかって言われたら、……10年前の俺が今の俺を見たら、きっと俺のことをヒーローとは呼ばないだろうな。

泉は落ち着いたようだ。

泉 ……ごめんなさい。

松田 ん？

泉 殺せって言ったけど、ごめんなさい、……撃たれてみて、やっぱ死ぬの、怖い……。

松田 ああ、そう。

泉 私も喋っていいですか、今みたいな感じで、

松田 ま、いんじゃないの。

泉 ……ああ、やっぱいいです、つまないわ、この話。

松田 そう。

泉 10年前のあたしが今のあたし見たら、なに思うんだろう。

松田 頑張れって思うんじゃない？

泉 ……。

松田 いや、もう頑張らなくていい、かもな。

泉 もう頑張らなくていいんすか……？

松田 自分で決めろ。

泉 ……「俺には泉ちゃんが必要なんだよ」とか、「泉ちゃんのおかげで今回の事業は大成功だよ」とか言われて、あたしの仕事でみんなが幸せになって、とか、あきらめろって話ですかね……。

本田 俺には泉ちゃんが必要なんだよー。

泉 キモい。

本田 ……そう、キモいんです、僕。

泉 (ちよっと笑う)

本田 (松田に) ああ、ヒーローつてもうなれないんですか。

松田 (本田を見る)

本田 まだ人生長いじゃないですか。

松田 無理だよ。

本田 (泉に) ねえ、あなたの仕事で人を幸せにするのって、無理なんですかね？

泉 無理。

本田、拳銃を取り、自分のコメカミに銃口をあてる。

本田 松田さん、ほら、見てください。僕、コメカミに

銃突きつけてますよ。死にますよ。いいんですか。

松田　なんでだよ。

本田　理由なんかないです。あと10秒で死にます。

松田　やめとけて。

本田　10、9、8、

松田　どうせ死ねないよ。

本田　本気で言ってるんだ俺は！　7、6、5、

松田　どうしたんだよ、

本田　ヒーローなんだろ。……ヒーローが、人が死のう  
としてののを、そのまま見過ごすのか。それがヒーロ  
ーなのかよ。

松田　……。

本田　4、3、2、1、

松田　くそつ、ふん！（拳銃を奪う）

本田　……

松田　二度と拳銃持つなお前は。

本田　……なんで助けたんですか？

松田　助けるのに理由なんかいらねえだろ。

本田　……ほら、なれるんですよ、今からでも。

鈴木　……ちよつと待って。今の、

本田　？

鈴木　もう一回やってみて。

松田　恥ずかしいっすよ。

鈴木　いいから。拳銃奪うところから、

本田　いや、

鈴木　いいから。

本田がもう一度拳銃を持ち、松田が奪う。

松田　くそつ、ふん！（拳銃を奪う）

本田　……なんで助けたんですか？

松田　助けるのに理由なんかいらねえだろ。

本田　……ほら、なれるんだよ、今からでも。

鈴木　これだ。

本田　なんですか。

鈴木　作品の題材。あ、でも……、

泉　なんですか。

鈴木　小説っていうよりは、……もつとこう、二人が舞  
台でさ、

松田　ショーの台本？

鈴木　そう。

本田　え？

鈴木　だから私が台本書いて、二人が、それをやるの。

本田　え、でも僕、アクターとかじゃないですし、

松田　今やったようにやればいいんだよ。

本田　ええ？

鈴木　なんか小さくてもいいからさ、チラシとか作って  
さ、

泉 あ、

三人、泉を見る。

泉 (控えめに手を挙げて) あたし、チラシ作れる。

鈴木 ほら！

本田 でも、やるったってどこで？

鈴木 どこって……、(ぱっと見まわして) ここ！

本田 こんなボロいところでやったって、だってステージ  
だって……、つくれる。

鈴木 一級建築士！

本田 でもだってお金もかかるし、

松田 多少はなんとかなるよ。

本田 ええ？

泉 こういう土地とか建物って高いんですか、

本田 どうだろう……この感じじゃ、立地的にも相当安  
くすむと思うけど。でもここ人通りも少ないし、お客  
さんなんて来るかどうか、

泉 たぶんある程度はなんとかできる、かな……？

鈴木 書くよ。みんながやらないって言っても、私書く  
からね。

松田 ちょっと体とか鍛えなおさないとな。

泉 (鈴木に) あの、あとで宣伝のコンセプトとか、そう  
いうのきかせてもらっても、

鈴木 ああうん、わかった。

松田 (本田に) いいか、まずは体作りからだ。ビシバシ  
いくぞ。

本田 ああ、うん。

本田、スマートフォンに声を吹き込んでいる。

本田 さて、なぜ俺が死にゆのか、(自分の頬を叩く) なぜ  
俺が死ぬのか、それは……なんだったかな。きっと死  
のうと思っていたことすら、そうやって忘れていくの  
かもしれない。このメッセージを聞く人はいないだろ  
うけど、もし偶然誰かがこのメッセージをきいて、今  
あなたが、この世界から消えようとしているなら、

松田 おし、そろそろいくぞ本田、

本田 ああ、うん。

二人は去っていく。

泉 今日もそこそ入ってますね。

鈴木 泉ちゃんの宣伝のおかげね。

泉 でも、まだまだ連日満員にはほど遠いですね。

鈴木 本田くんとは順調？

泉 あ、実は……、

鈴木 え、その指輪……

二人の声がきこえてくる。

本田の声 ヒーローなんだろ。……ヒーローが、人が死  
のうとしてるのを、そのまま見過ごすのか。それがヒ  
ーローなのかよ。

松田の声 ……。

本田の声 4、3、2、1、……なんで助けたんですか？

松田の声 助けるのに理由なんかいらねえだろ。

本田の声 ……ほら、なれるんですよ、今からでも。

鈴木 ちよつ泉ちゃん、

鈴木は泉を祝福する。

舞台から、拍手の音が聞こえてくる。

—  
幕

作・小佐部明広